

牧田英二

中国边境の文学

少数民族の作家と作品



同学社

牧田英二

中国边境の文学

少数民族の作家と作品

同学社

牧田英二（まきた えいじ）

1937年大阪市生まれ。大阪外国語大学卒。東京都立大学大学院修了。

現在、早稲田大学語学教育研究所教授。専攻 中国語学・文学

主な訳書「義和団民話集」（共訳、平凡社）、「歴史人物」（郭沫若選集、雄渾社）、「王蒙・淡い灰色の瞳」（共訳、現代中国文学選集1 徳間書店）



中国辺境の文学
——少数民族の作家と作品——

1989年5月8日 初版発行

著 者 牧田英二
発行者 近藤久寿治

発行所 株式会社 同 学 社

〒112 東京都文京区水道1-10-7
電話 (03) 816-7011
振替東京 5-166920

© 1989
E. Maktia 検印廃止

印刷・共立社／製本・井上製本
ISBN 4-8102-0250-X

はじめに

——序にかえて——

◆少数民族の作家

中国の文芸雑誌をみると、作者が少数民族の場合は一般にその民族名も記されている。漢族の作家には何も記されない。雑誌によっては少数民族の作品が比較的多く掲載されているものもある。ほとんど載っていないものもある。『人民文学』についてみると、一九八四年の一年間に百四編の小説が載っているが、少数民族はチベット族、ムラオ族、エヴェンキ族、モンゴル族、満州族、キン族の作者の小説が各一編みられる。偶然だろうが、少数民族の人口が中国総人口の約六・七％だという数字に符合している。ここ数年の『人民文学』はみなほぼ同じ割合になっている。なにか行政的な配慮が働いているのではないかと想像させるほどだ。

それでは少数民族の作家はどれくらいいるのだろうか。（ここでいう作家とは専業作家ばかりでなく、労働者、教員、雑誌の編集者、文化館の職員というように他に本職をもつ人たちも含む）一つの目安として作家の全国組織である中国作家協会の会員でみると、一九八六年の段階で全会員は三、一〇六名であるが、そのうち少数民族会員が二八八名、全体の九％強を占め、人口

比率よりも多い。民族別にみると、モンゴル族と朝鮮族が三十数人といちばん多く、満州族、ウイグル族、回族が二十数人、チベット族がそれにつづき、チワン族とカザフ族が十人余り、ペー族、ミャオ族、トン族、彝族が十人足らず、土家族、シボ族、ダフル族、ナシ族、タイ族、ムラオ族、キン族、エヴェンキ族、トンシャン族、キルギス族などが一、二名となっている。そのほか全国各地に三十の作家協会分会があり、その中の少数民族会員は一、七〇〇人に達する。一応これらの人々を中核とした少数民族文学の大きな創作集団があるとみていいだろう。

◆『民族文学』の創刊

少数民族文学の全国誌『民族文学』は、中国作家協会の刊行物であり、資金的には民族事務委員会のバックアップを得て出版も民族出版社が行なっている。一九八一年に隔月刊として創刊され、翌八二年から月刊となった。当初はチベット語、モンゴル語、朝鮮語、カザフ語、ウイグル語の各民族語版も計画されていたが、条件がととのっていないということから、漢語版のみの刊行となった。創刊らしい主編は馮牧^{フオンム}であったが、八五年の機構改革で、現在は馬拉チンフ（モンゴル族）が主編、金哲^{チンヂョ}（朝鮮族）と白崇人^{バイチュンレン}（回族）が副主編である。『民族文学』は一般の文芸誌とは異なり、少数民族作家の組織化、新人作家の発見と養成の役割もになっており、毎年有望な新人を集めて創作研究会が開かれている。約一カ月、編集者や先輩作家ともども合宿形式で、各自作品を書き、持ち寄った作品を相互に検討しあったりする。これまで多くの中青年作家が参加し、雑誌の原稿の来源にもなっている。作品の質を向上させるねらいとともに、すべての民族

が自らの作家をもつことをめざしている。

全国誌『民族文学』のほかには省、自治区クラスの少数民族文学を主体とした、あるいは比較的多くとりあげている雑誌は八十余種にのぼり、新疆の『民族作家』『新疆回族文学』『中国西部文学』、雲南の『大西南文学』、遼寧省の『満族文学』、内蒙古の『草原』、チベットの『西藏文学』、青海の『青海湖』、貴州の『山花』などの漢語誌のほか、とくにウイグル族、カザフ族、朝鮮族、モンゴル族、チベット族などの民族集中地区では民族の言語による文芸雑誌が出されている。民族語による文芸誌だけで全国に五十種ほどあるという。

◆言語の問題

少数民族作家が何語で書くか、具体的には漢語（中国語）か民族語かということになるが、上に挙げたウイグル、カザフ、朝鮮、モンゴル、チベットなどの民族は自らの言語と文字をもっており、書面言語による文学の伝統もあって、とくにウイグル族、カザフ族、朝鮮族はほとんどが民族語で創作されており、モンゴル族は半数以上の人がモンゴル語で書き、漢語とモンゴル語の両方で書くバイリンガル作家も少なくない。チベット族についても、チベット自治区のほか青海、甘粛、四川、雲南の各チベット自治州でチベット語と漢語の両方の雑誌が出されていることから知られるように民族語で書く人が多い。一方、回族と満州族は自己の言語を失って漢語を用いているし、大半の少数民族は民族語はあっても固有の文字はもっておらず、作者はほとんどみな漢語を用いて作品を書いている。一九五六年から五八年にかけてチワン語、ミャオ語、イ語、トン

語、ハニ語、チンポー語、リス語などにローマ字による文字がつけられたが、その後の民族政策の混乱であまり普及していなかった。近年ふたたび普及活動に力が入れられているが、一般的にいつて、それによって創作を可能にする条件は乏しい。ただ、チワン族は一九八六年秋から『三月三』チワン語版を創刊し、チワン語で書いた作品が掲載されている。チワン語の小説はここ数年の間にすでに二百編以上が発表されているという（『民族文学研究』八八・五）。ほとんどの作者が創作は初めてだという若い人であり、これまで漢語で書いていたチワン族作家がチワン語で書いたということではない。チンポー族にはバイリンガル作家も何人かいる。ほかの民族でも民間文学の採集整理に用いられたり、民族の歌手が自ら創作した歌を民族文字で記すということは行なわれているようだ。

◆ 民族文学とは

何をもって少数民族文学（あるいは民族文学）というか。その範疇をめぐっては中国で数年来いろんな議論があるところだが、作者が少数民族であればその作品は民族文学の範囲にあり、作者も少数民族作家だと単純に言い切れない側面があるからである。

少数民族の作者が自民族の言葉を用いて、その民族の人々の生活を描いていれば、その民族の文学だと言っているだろうが、作者が少数民族でありさえすれば、その作品もすべて少数民族文学のなかに含めていいかとなると、ややためらいがおこることがある。老舍が満州族、李準がモンゴル族ではあっても、あるいは沈從文がミャオ族と土家族の血をひいているとしても彼ら

の文学をその民族の文学の範疇に含めるには読者の側にもまだ多少抵抗があることは否定できないだろう。また、ダフル族の李陀^{リィト}、回族の沙葉新^{シャイェン}、陳村^{チェンツン}などはその作品の多くが北京や上海の市民生活を反映したものだ。したがって都市で育ち漢族と同じ生活基盤をもつ少数民族の作家が漢語によって漢族の生活を描くとき、彼らを雲南や貴州の辺境でその地の少数民族のなかで育った民族作家と同じようにみていいかという問題を検討する必要がある。しかし一方で辺境地区を創作の基盤とする少数民族作家であっても自民族ではなく他の民族を題材にした作品が少なくない。ペー族の楊蘇^{ヤンズ}、張長^{チャンチン}、トン族の張作^{チャンツォウ}、ミャオ族の李必雨^{リーピーユ}、土家族の汪承棟^{ワンチンセントン}らは任地の関係からではあるが、むしろほかの民族を書いたもののほうが多い。ここでは深入りはさけるが、私は、その作者がどの言語で書くか、どの民族のことを書いているかにかかわらず、少数民族の作者が創作した作品であれば一応それを少数民族文学とみなしておいていいのではないかと考える。問題は漢族の文学とのちがいを質的な面でどうとらえられるかということであろう。少数民族文学が単に漢族以外の作家が書いた文学の総和であってはなるまい。

従来、中国文学といえは漢族文学のことであり、中国文学史といっても実質的には漢族文学史であるという状況がながく続き、現在も基本的にはあまりかわりがないといえよう。少数民族の文学といえば神話伝説、説話、叙事詩、古歌などの口承文芸によって代表されるだけで、小説や詩を創作する「作家文学」はあまり注目されることがなく、少数民族文学が取り上げられることがあっても漢族文学の付属、付け足しのように扱われがちであった。

少数民族文学の指導的立場にあるモンゴル族作家マラチンフが次のようなエピソードを伝えている。エヴェンキ族の青年作家ウロルトが、ある日北京在住のダフル族作家李陀を訪ねた。李陀はやはり彼を訪ねてきていたある女優にウロルトのことを、彼はエヴェンキ族の作家で短編小説は三度も受賞していると紹介したところ、彼女はそのような作家は知らない、私は少数民族の文学作品など読んだことがないと、いたって冷淡な態度をみせた。この話をマラチンフに伝えたウロルトはたいへんショックを受けていたようだったという。

マラチンフはこの話のあと、この女優の教養不足、礼儀知らずという側面は否定できないものの、彼女を責めることはできず、少数民族文学の側が全国を震撼させるような強烈な芸術的衝撃をもった作品を生み出して、その芸術の力によって、彼女から再びあの不愉快な言葉を聞くことがないようにすべきだと述べている。漢族作家のあと追い、漢族文学の模倣に終わっているとき、少数民族文学が漢族文学の付け足しの位置からぬけ出すことはできない。しかしここ数年活躍が著しい張承志^{チャンチョンジー}（回族）、ザシダワ^{チベット族}（チベット族）、蔡測海^{ツァイハ}（土家族）、孫健忠^{スンチンヂョン}（土家族）、ウロルト（エヴェンキ族）などはすでに漢族文学の類型にとらわれることなく、ときにはソ連キルギス族作家アイトマートフや、ボルヘス、マルケスなどラテン・アメリカの文学をとりいれて民族の歴史と現実を直視し民族文化の土壌と結合した芸術性高い作品を生み出しており、中国文学のなかに少数民族作家が占める位置を確実なものにしてきている。

◆ 民族文学の展開

解放前の中国では少数民族文学という概念そのものがなかった。イ族の李喬は三〇年代の上海から作品を書き始め、『申報・自由談』や『中流』などに少年時代に働いた雲南箇旧での坑夫生活の体験を発表し、チワン族の陸地は抗日戦中に延安に赴き抗日軍政大学、魯迅芸術学院で学び、文芸誌に小説を発表していたというような個別的な活動はあったが、少数民族文学（一時は兄弟民族文学とも称した）という概念が提唱され、少数民族の作家の養成がはかられるようになったのは、一九五〇年代の中頃になってからである。解放後の少数民族の生活を書いていたのは主として解放軍に従軍していた漢族作家であり、白樺、彭荆風、徐懷中、高縵などの漢族作家が雲南や四川の辺境での体験にもとづいた現地の少数民族を反映した作品が、当時の少数民族文学を代行していたといえよう。五〇年代に現れた楊蘇、那家倫（ペー族）、マラチンフ、アオドスル、ボンスク（以上モンゴル族）もみな軍内での宣伝や文化関係の仕事から育ってきた人たちである。一方ケイム・トゥルディ（ウイグル族）、伍略（ミャオ族）、普飛（イ族）などのように幹部（あるいは記者）として民族地区の土地改革や協同化に従事した農村を基盤とする人も現れた。李喬や陸地も少数民族作家として再出発した。これら五〇年代の作家の作品は一九五九年の建国十周年を記念して出版された少数民族短編小説集「新生活の光輝」でみることができる。十民族の十九人から四十六編の作品が収められているが、モンゴル族が七人、二十七編ときわだって多く、当時の少数民族文学の不均衡な状況をそのまま反映している。

五〇年代の小説は漢族作家の模倣あるいはその後追いかから始まったといえよう。そして大部分

が歌頌^{たたえる}文学であつた。民族の新生活をたたえ、民族団結をたたえ、共産党の政策をたたえるものである。解放軍やゲリラ隊の民族解放の闘争を描き、土地改革から合作化へ進む当時の政策が民族地区でどのように実施され、大衆がいかにそれを擁護しているかを性急に示そうとしているようにみえる。楊蘇、普飛、ハウスリハン（カザフ族）などは民族の伝統意識と変革する新社会との間の軋轢に目をむけているが、この時期の傾向としては全体的に作者には民族の伝統文化、生活規範、民族心理など民族独自のものに目を向ける余裕もなくひたすら当時の政治状況に身を添わせようとしているようであつた。六〇年代になつても滕樹嵩^{トンシュン}（トン族）の「侗家人」（六二年）、孫健忠（土家族）の「五台山伝奇」（六三年）など民族的特徴をとらえ、民族の人情、傷みを描いたものはむしろ批判の対象となつていた。

◆ 文革後の作品

文化大革命の長い停滞期のあと、五、六〇年代からの中年、老年作家のほかに冒頭に述べたように多くの新人作家が現れた。七八、七九年以来まず出てきたのは、極左路線によって民族の伝統が破壊され人間性が踏みじられたことへの怒りや心の傷みを書いた一群の作品だった。当時全国的に反響をよんでいた劉心武^{リウシンウ}の「クラス担任」や盧新華^{ルシンホア}の「傷痕」の影響もあつたであろう。アクトバル・メジットの「ヌルマン老人と獵犬パリス」、孫健忠の「郷愁」、戈阿干的「美人洞」、羅国凡^{ルオクオファン}「崖の上の花」、ズルドウン・サビールの「刀朗青年」、ウロルトの「ある獵師の願い」、伍略の「麻栗溝」など、文化大革命が各民族にどのような災厄をもたらし、民族の美しいもの、

善なるものを踏みつけていったかを糾弾したものであった。しかしやがて、民族の伝統的なものはほんとに美しいのか、善意にみち心優しいものが却って人を抑圧し、がんじがらめな閉塞状態をつくりだしているのではないかという、自分たちの民族を見直す作品がみられるようになった。蔡測海の「遠くの木を伐る音」、「白河」、羅吉万の「青紫色のくさり」、藍懷昌の「プルパ牛が涙を流した」、景宜の「魚にまたがる女」、アクバル・メジット「ああ、十五歳のハリタイよ」、ザシダワの「星のない夜」、戈阿干の「燃えあがるシャクナゲ」などがそれである。

民族への見直しは、さらに強烈な民族意識を呼び起こし、自分たちはどういう民族なのかを問う、言い換えれば、民族のアイデンティティーをもとめる作品が出て来るようになった。辺玲玲が満州族のルーツをもとめて「白ツツジ」や「トープタリー」を書き、張承志が西北に入って「九座の宮殿」「黄泥の小屋」などの作品で回族の源流をさぐった。孫健忠、蔡測海が原始、神話的世界から現代文明を問い直し、さらにザシダワが一連の作品で、宗教世界を通してチベットの古代と現代をまるごとつかみとろうとした。またザシダワの「朝仏」、マラチンフの「活仏の話」、タンチュ・アンペンの「草原の伝説」、鮑義志の「むせび泣くラマ教のラッパ」など人々の宗教意識を見すえて民族の古い觀念、愚かさを追求している作品も生み出した。

広大な民族地区にさまざまな生の営みをおくっている少数民族がその多様性、地域性のなかから、漢族文学とは異なる独自の民族的作品を生み出しつつあるといえるのではなからうか。本書からその一端でも感じとっていただければ幸いである。

中国辺境の文学

——少数民族の作家と作品——

写真

中国少数民族地区画集叢刊

民族画報

民族文学

民族出版社

民族出版社

民族出版社

中国辺境の文学 目次

目 次

はじめに——序にかえて——	1
ウロルト (エヴェンキ族)	1
マラチンフ (モンゴル族)	11
辺 玲 玲 (満州族)	21
趙大年 (満州族)	28
ズルドウン・サビール (ウイグル族)	34
ムハメット・バグラシ (ウイグル族)	41
アクバル・メジット (カザフ族)	43
白 辛 (ホジエン族)	51
張承志 (回族)	57